安積の歴史シリーズ

第34回　近代　座繰製糸（ざぐりせいし）と水道事業

柳田　和久（やなぎだ　かずひさ）
郡山市文化財保護審議会
委員

座繰製糸の発達

安積郡や田村郡の村々では、幕末期には蚕を飼う農家が増え養蚕が盛んに行われていた。一般的に行われていたのは座繰製糸といわれるもので、第１図のように繭から糸を巻き取るために、片方の手で釜で煮た繭を操りながら、もう片方の手で座繰機に取り付けたハンドルで、糸枠を廻しながら巻き取る方法である。座繰機とは糸を紡ぐ道具のことで、糸商人が農家に座繰機と繭を貸して糸を紡がせ、手間賃を払うというものである[1]。

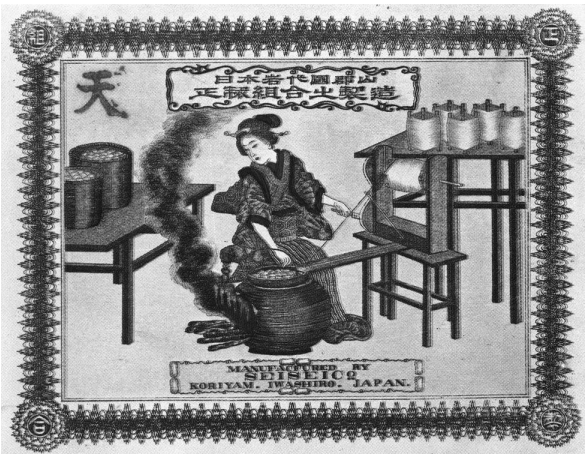
しかし、各自がそれぞれ糸を紡ぐため、人によって太い・細い等の欠点があった。これを貿易品として海外に輸出するには、糸を優良な物に仕上げ、しかも均一に大量生産する必要があった[1]。そのため、各地に製糸所が建設された。

明治政府は、明治５年に富岡製糸場等を建設し製糸輸出の発達を図った。福島県は、安積郡と安達郡の産業振興を図るため、翌６年に二本松城の一角に二本松製糸所を建設した。同６年から大槻原開墾（桑野村開墾）を行い、開墾地に桑を植えさせるため、元二本松藩士族を入殖させ、桑の葉を二本松製糸所に運ぶ計画であった。しかし、元二本松藩士族は思うように集まらなかった。そのため、福島県は開成社や平民を入殖させた。元二本松士族は畑に開墾したが、開成社は畑作だけでなく稲作を願い出た。福島県は稲作を許可したため、開成社は畑作と稲作を行った。平民は畑作と稲作を行う者と、畑作を行う者に分かれた。

福島県は、二本松製糸所の建設と大槻原開墾を連動させて、開墾地の畑に主に桑を植えさせ、安積郡・安達郡の製糸産業の発展を計ったのである[2]。

正製組と真製社の設立

郡山に座繰製糸所が建てられた。正製組と真製社である。



第１図　正製組の商標（『郡山市史』４口絵より掲載）

正製組は、明治13年（1880）に永戸直之介・柳沼恒五郎・安藤忠助・甲斐山忠左衛門が発起人となり、各自が資金を出しあい6,000円を基に創設された。工場は当初は柳沼恒五郎所有の養蚕所を仮工場としたが、翌年２月に金透学校（現 金透小学校）の北隣に工場と事務所を建築した。当初は資金不足で設備が不十分であったため、国立第93銀行郡山出張所や同須賀川第８銀行・同横浜第74銀行から5,000円ずつの合計15,000円を借り入れて設備を整えた。正製組の従業員は60名（男38名・女22名）、その他に賃取女工537名であった。賃取女工とは家庭の婦人に内職的糸取作業を委託した工員である[3]。

正製組は操業を開始すると、横浜をはじめ輸出商から注文が相次ぎ、創業第１期の事業決算は支出46,757円に対し、収入は59,020円となり、12,263円の利益を得た。そのため設備を整え、明治19年７月には田村郡南小泉村に出張所を設置し、翌年７月には白川城跡に製糸所小峰館を設立した[3]。

真製社は、明治14年（1881）７月に、橋本清左衛門・七島源兵衛・佐々木鉄太郎・鴫原弥作・川口半右衛門・柳沼常八・小針子之吉・斎藤久之丞・宗形弥兵衛等が中心となり、第１表のように43名が20,000円を出資して設立した[4]。明治16年（1883）の職工は35名、その他に賃取女工280名である。設立時の社長は鴫原弥作であったが、同16年に副社長の橋本清左衛門が社長に就任し解散するまで在職した。

真製社は、正製組と同様に海外の信用を得るため、良質な生糸の生産に努め、そのため職工や女工を育て教育することなどを定めている。真製社は、明治20年３月に田村町徳定村と東白川郡石井村に分社を設け、同年７月に三春と須賀川に取扱所を、翌年７月には二本松に取扱所を設置した[5]。

第２図　真製社の商標（『郡山市史』４口絵より掲載）

第１表　真製社の出資者と出資金

出資者名	出資額	備考
橋本清左衛門	3,500円	無限責任者
七島源兵衛	1,500円	無限責任者
佐々木鉄太郎	1,250円	無限責任者
鴫原弥作	1,250円	無限責任者
川口半右衛門	1,200円	無限責任者
松本文之助	1,200円	無限責任者
柳沼常八	1,100円	無限責任者
小針子之吉	1,100円	
川口忠蔵後見人 植杉新太郎	1,000円	
稲沢喜惣治	750円	
斎藤久之丞	600円	無限責任者
影山今朝松	550円	
宗形弥兵衛	500円	無限責任者
今泉久次郎	500円	
桜井政吉	500円	
遠藤亀之助後見人 遠藤辰吉	250円	
橋本和助	250円	
渡辺季之助	250円	
武田重蔵	200円	
橋本太平	200円	
山田平太郎	200円	
橋本藤助	200円	
植杉新太郎	200円	
橋本治助	150円	
遠藤丑蔵	150円	
安藤清兵衛	100円	
半沢精四郎	100円	
大橋半七郎	100円	
岡野久四郎	100円	
鈴木周平	100円	
永井英太郎	100円	
宗形卯吉	100円	
高橋晴治	100円	
湯浅為之進	100円	
橋本藤左衛門	100円	
渡辺万吉	100円	
斎藤宗七	50円	
佐藤勝枝	50円	
宗形勝蔵	50円	
今泉定七郎	50円	
佐藤政右衛門	50円	
国分鉄太郎	50円	
村田久次郎	50円	
合計	20,000円	

第２表　多田野水道の出資者と出資金

出資者名		出資金	摘要
発起人	永戸直之介	650円	正製組
	安藤忠助	650円	正製組
	甲斐山忠左衛門	650円	正製組
	柳沼恒五郎	650円	正製組
	津野喜七	650円	
	橋本清左衛門	650円	真製社
	佐藤伝兵衛	650円	
	川口半右衛門	650円	真製社惣代
賛成人	根本祐太郎	150円	
	今泉久三郎	100円	
	阿部茂左衛門	50円	
	熊田脩司	50円	
	宗形卯吉	50円	

多田野水道の創設

明治21年（1888）に、永戸直之介・川口半右衛門等が水道会社を設立した。多田野水道である。発起人・賛成人と出資金は第２表のとおりである[6]。正製組の永戸直之介・安藤忠助・甲斐山忠左衛門・柳沼恒五郎、真製社の橋本清左衛門・川口半右衛門が発起人となり創設した。正製組・真製社は、光沢のある良質な糸にするためには良質な水が必要であることから多田野水道を引いたのである。水道は多田野村字清水池、同村字木置場、同村字柳河原から水を引き、大槻村・桑野村を流し郡山町まで引水するもので、明治23年（1890）５月に完成した[7]。これにより、郡山町には皿沼水道・山水道・多田野水道の３つの水道を有することになった。

皿沼水道は、皿沼（現 郡山商工会議所）から郡山の大町・中町・本町等に水を引いて飲料水としていた。皿沼は享和３年（1803）の「郡山村両町大概記上帳」に、古来の池と記載しているが、造られた年号は記載していない[8]。享和３年には造られた年号が分からなくなっているのである。皿沼の築造は古く、江戸時代以前に遡るものと考えられる。

山水道は明和５年（1768）に造られたもので、郡山の富裕な商人が清水台・赤木・虎丸辺りに井戸を掘り、そこから各自の家に引いたのである。余水（あまり）は、近所の家ではもらい水として使用していた[9]。

明治15年（1882）に安積疏水が通水すると、安積疏水第５分水路から南川・壇経川に分水した。壇経川は下ノ池（元 豊田浄水場）に注いでいる。南川は大槻村の静御前堂付近で別れ、一方は五百渕に注ぎ、一方は上ノ池（現 五十鈴湖）・細沼・皿沼・酒蓋池・荒池へ注いでいる。

近代の上水道に統一

明治23年（1890）、明治政府は水道条例を公布し、水道は市町村が設置し管理するものとした。そのため、皿沼水道・多田野水道を郡山町に寄附せざるをえなくなった。同24年10月に皿沼水道、翌25年11月に多田野水道の一切の権利・義務を郡山町に譲った[10]。

郡山町は町勢が拡張するにしたがって、水質の保全や衛生上の問題、軍隊誘致から起きる水不足、製糸紡績会社等の工業用水の必要から生じる水不足、人口増加による水不足、防火用水の確保等が問題となってきた。そのうえ、皿沼水道・多田野水道の木管は腐敗し、継目から雨水・泥水が混流するなどの問題も起きた[11]。

これらの問題を解消するため、明治33年（1900）、郡山町長に再選した今泉久次郎は新水道の敷設を計った。同39年（1909）10月に工事に着手し、同41年３月に完成した。新水道は麓山の下ノ池（元豊田浄水場）を沈殿池とし、多田野水道と南川から下ノ池に入れ、配水管を鉄管に切り替えた。この近代の上水道の完成によって皿沼水道・多田野水道は廃止された[11]。

注

(1)　『郡山市史』４　148頁、149頁
(2)　『殖産興業と地域開発－安積開拓の研究－』74頁
(3)　『郡山市史』４　176頁、『郡山市史』９　210頁
(4)　郡山市歴史資料館所蔵今泉家文書
(5)　『郡山市史』４　179頁、『郡山市史』９　212頁
(6)　明治22～25年『多田野水道に関する記録』今泉家文書
(7)　『郡山市史』４　456頁
(8)　『郡山市史』８　652頁
(9)　『郡山市史』３　216頁
(10)　『郡山市史』４　457頁
(11)　『郡山市史』４　458頁